
魔法先生ネギま！～二人の子供は魔法先生～

フラット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギまー～ 一人の子供は魔法先生～

【NZコード】

N43353D

【作者名】

フリット

【あらすじ】

魔法学校を卒業し“立派な魔法使い”になるため修業として先生になつたネギ、ある日一通の手紙によつて止むを得ず先生となつたレイズ。二人の子供先生が進んでいく物語とは！？ ご意見・ご感想・評価などお待ちしています。まだ表現力に自信が無いので間違つたところやもう少し分かりやすく……など是非是非書いていてください！

1時間目 不幸な手紙

赤い

周りを見渡しても赤赤赤
真っ赤な紅蓮の炎が町を覆い尽くす

その中には

人外の悪魔

石にされた者

殺された者

戦う者

守る者

その中に一人

全身が血まみれの子供がいた

その瞳には感情が無いかのように光を失っている

子供を中心に多くの人が死体となつて辺りを更に赤く染めている

子供の眼からは一筋の涙が頬を伝い落ちていた

機械音の主に手を伸ばしゆつくりと起き上がる。

時刻は現在6時。

「ん？」

ベッドの上で小ねく背伸びする。

顔洗うか

家中は蒸し暑いほど暖かく、
窓からは日の光が差し込んでいます。

ふう
…………

今日も暑いなあ。
顔を洗い終えて今は玄関の方へ向かっている。
一人暮らしだと毎日郵便物をチェックするのが日課になってしまつた。

「さて……と、何か届いてるかな」

そう呟き郵便受けに手をかける。

ガチャッ

郵便受けの中には小さな小包と手紙が2通。
小包の方は差出人の名前がどこにも書いていなかつた。

「ん? 誰からだろ」

怪しさ半分期待半分で小包を開けると、
中に入つていたのは…………

「鍵…………だよな？ それと腕輪か」

鍵と腕輪を手に取り多方向から観察してみた。

鍵は銀素材で出来ていてなんとも言えぬ歪な形をした物だった。

腕輪は木製で表面には鉄板が固定されていてその上に文字が刻まれている。

腕輪が置いてあった側には説明書のような紙が備えられている。

「え～と…………『LJの製品をお買い上げ下さい』とあります
ヒヒヒヒヒヒ。』」

.....

いやいや、買った覚えないし。

心の中でつっこみをいれ続きを読むでいく。

～紙の内容～

『LJの製品をお買い上げ下さい』とあります。
製品説明・LJの腕輪は左右の手どちらに付けたかで効力が変わります。

す。

右手・身体能力が多少上がります。

左手・半径300M以内のあらゆるものを感じできるようになります

す。

尚、この製品は杖の代わりとなる媒体でもあります。
左右どちらに付けても魔法発動体として利用できます。』

「ああ～…………うん、どちらも魔法使えばできるな。
それにしても曖昧な説明だなあ…………

まあ魔法で強度上がってるみたいだから壊れる心配は無いか」

次に手紙の方へ手を伸ばした。

差出人 クレアス・F・ブライアンク

ん？ 師匠から？

一体何の用だ？

魔法界の手紙は録画式で再生を押すと立体映像で出てくる。
まあビデオカメラだとでも思ってくれ。
封を開けて再生ボタンを押す。

「どれどれ…………」

翌日

視点　　？？？　in　ウェールズ　メルティアナ魔法学校

『卒業証書授』

この七年間よくがんばってきた

だが　これから修業が本番だ

『氣を抜く出ないぞ』

『ネギ・スプリングフィールド君』

「ハイ！」

そこでは魔法使い達が集まりこの学校を卒業していく5人の子供達
への卒業式が行われていた。

「ふわあ…………」

魔法学校の卒業式が行われている中、隅の方であぐびをする少年。
なうんて俺がこんなのが見なくちゃいけないんでしょ。
卒業はおろか入学すらしてないのに。

それは昨日の手紙のことだ。

手紙の内容はこうだ

『やあ、レイズ 久しづびだな。 一人暮らしにはもう慣れたか?
プレゼントはどうだ? 腕輪の方は知り合いの店に作ってもらつた。
ああ鍵は無くすなよ 常に大事に持つておけ もし無くしたら……』

それと明日の朝ウェーラズの魔法学校に行け 場所くらいは知つて
いるだろ。

そこは校長にもう一つ方の手紙を渡せ わかつたな?
ではまたいつか。 bソクレアス』

無くしたらなにを……
いきなり送りつけてこれかよ!
てかあそこって山奥じゃねえか! 直接送れよ!
はあ………… しょうがないか……
行かなかつたら何されるかわかつたもんじゃないからなあ。

「はあ~」

小さな溜め息をついてリビングへと入つて行く。

そして今日の朝

「やつとついたあ～つ…………」

持つてきた力バンを地面に置き、
疲れたためか軽く背伸びする。

目の前には白い石造の大きな教会のような建造物。
建物の周りには緑が生い茂つている。

それにもかかわらず、さすが魔法学校

…………関係無いか。

さて…………入るか。

「うん…………捕まつてしましました、ハイ。

「子供がこんなところに勝手に入り込んだらダメだろ」

今、某神殿のような壁が無く石柱が続いている廊下に居ます。

ローブを被った男が数人。
やっぱ全員魔法使いだなあ……

「うん、ここ」の校長に手紙を届けに来ただけだから」

「今日は卒業式だから校長は忙しいんだよ、わかつたかな」

「だから渡したらすぐ帰るから」

男の一人が肩をすくめた。

はあ……このままじゃ帰るの遅くなるな。

そんなことを考えていると後ろの方から人が近づいてきた。

「どうしたんじゃ、騒々しい」

振り向くとそこには老人がいた。

アホ毛が4つあり白髪で腰の位置まで伸びている髪。

大きく立派なヒゲは胸の位置まである。

肌は焼けていて茶色になっている。

他の人とは違い立派な杖を持ち、

大きな土色のローブを着ていて足がすっかり隠れてしまっている。
ていうか見えているのは顔と手だけだ。

「あ、校長！ 実はですね この子供が「あなたが校長？」 あ、こ
らー！」

「そうじゅが、君は誰かの？」

身なりを整え一礼して口を開く。

「申し遅れました、我が名は
レイズ・G・フライネスと申します。
我が師クレアス・F・ブライアンクの命により
校長であるあなたに手紙を届けに参りました」

「ふむ……」

クレアスから手紙とな
では」の子が……

「どうぞ」

そしてまだ開封していない手紙を渡す。

「うむ、確かに受け取った」

受け取った手紙をローブの中へ入れる。

「では私はこれで失礼します」

また一礼してこの場を去ろうとする。
しかし

「ああ、ちよつと待ちなさい」

「はい、何でしよう?」

その言葉を聞いて近くにいる男の一人が、
「あの…………校長、そろそろお時間の方が」

「わかつておる、すぐ済むからの」

「それで、何でしょうか?」

「うむ、今日は卒業式とこつのは知つておるかの?」

「はい、せつを聞きました」

「それが終わつたらワシのところへ一度来てくれ」

.....

「何故ですか?」

「ちよつと話したい事があるございや」

「うん……

びひするへ.

断るつか

でも流石に校長の頼みを無視できないよなあ

.....

「わかりました、終わつたらまた伺います」

「やうか、それなら卒業式でも見てゆけばよからひ

そつ言い残しこの場を後にした。

そして現在に至る。

『アンナ・ホールウナ・プロロカラ』

ん、最後か

そういうや最初のやつスプリングフィールドとか言つてたな?

スプリングフィールド　スプリングフィールド

どつかで聞いたことあるな。

うへ　へんへん

ああ……………だめだ思い出せない。

まあいいや、どうせ俺には関係ナツシング。

視点 ネギ in 魔法学校 廊下

キ、キンチョウしたあ……………
もうすぐかな……………

卒業証書を手に持ち廊下を歩いていると後ろから一人の女性が追い
かけてきた。

一人は黒いローブを着ている子供、長髪で赤い髪の一部を2つの黄色いリボンでツインテール状にした女の子。

もう一人はこの学校の教員服を着た大人、金髪で長髪。両耳に白いパールのピアスをついている女性。

「ネギ 何で書いてあつた？ 私はロンデンド占い師よ

「修業の地はどこだつたの？」

「今 浮かび上がると」

そして卒業証書の紙が薄く光りだす。

「お.....」

「どう?」

光が集まつて文字になつていく。

浮かび上がつた文字は

「え~と.....」

A T E A C H E R I N J A P A N .

「日本で.....先生をやること」

「 「 「ええ

 「 「 ?」

え? ええええ!?

せ、せせせせ先生!?

ボボボ僕が！？

あ、ああわわわあああ

「と、とにかく… 校長に聞きて行きましょう。」

視点 レイズ

ええ～、今の状況を例えるなら

ここは何処、私はだ～れ？

みたいな感じです。

つまり迷つてしましました、ハイ。

俺は方向音痴ではありません。

この学校がメチャ広いんです。

「じうじょ……」

ああ～もう、校長どこ行つたら会えるのよ。

誰かに聞けつにもだれも居ないし……
うへん……

「お、 そうだあの腕輪使えばわかるかも」

確か持つてきてたよ、ううな……

お、あつたあつた。

でも初めて使うからなあ、うまくできるか……
カバンから腕輪を取り出し左手につける。

んつ
.....

身体中に一瞬魔力が走り、神経が研ぎ澄まされたように敏感になる。
おお、これは結構使えるかもな。
しかも魔力まで感知できるのか。

数十秒経ち、扱いにも慣れてきた。

説明書には書いてなかつたけど一方向に集中すれば感知できる範囲
が広まるな。

それに腕輪に魔力を込めても範囲が広がる。
そろそろ本気で探すか。

意識を集中させる。

「お、 いた。 一人が、 いや後ろにも一人いるな」

ん……流石に誰かまでは特定できないか。
性別もわからないしな。でも一人だけ魔力がデカイな
まあ俺と同じくらいかな？

ま、違う人でも校長の居場所聞けたらいいか。
そう思い急いで三人のもとへ向かう。

お、発見。

そこに居たのは一人の子供と一人の女性。

「すいませ」「ええ
！？」「な、何だ？」

「と、とにかく！ 校長に聞きに行きましょう！」

そう言つて三人は走つていつてしまつた。
校長のどこに行くのか、じゃ追つて行くか。
レイズも走つて後を追いかける。

視点 ネギ

日本が…………僕の…………先生………… まだ混乱してゐる様子。

長い石柱が続く廊下を走っているつかひ人影が見えてきた。

「！」、校長“先生”ついびーるー！とですかー？」

「まひ……“先生”か……」

「何かの間違いではないのですか？ 10歳で先生など無理ですかー？」

「やうよー。ネギつたらただでさえチビでボケで……」

アーニヤ……

「しかし、卒業証書にそつかいてあるのなら決まった事じや。立派な魔法使いになるためにはがんばって修業してくるしかないのう」

「ああひ

その言葉と同時に金髪の女性が倒れそつた勢いでふりつく。

「あ、お姉ちやんー！」

「ふむ……」

「安心せこ、修業先の学園長はワシの友人じやからのも、がんばりなさい」

「.....」

決心したためかネギの口元に少しの笑みが浮かび

「ハイ！ わかりました！」

一時観田 不幸な手紙（後書き）

初めまして！　この度小説を書かせていただいた　フラッシュ　と申します。

小説を書くのは初めてでして多分間違った文字や文法などこれから先出てくると思いますのでその時はどんどん指摘していく下さい！参考になりますので。

なお、しばらくは原作よりもなってしまつかもしれませんが、
そのところは勘弁して下さい……………^（—）^

休み時間 オリジナルキャラ設定（前書き）

第一回 オリキャラ設定～！

休み時間 オリジナルキャラ設定

名前：レイズ ・G・ ^{グライム} フライネス

性別：男

年齢：13

身長：163cm

性格：明るい方でめんどくさがり屋だが真面目でやる時はやる。一応礼儀はわきまえている。

大抵の物事には冷静に判断し対処する。

趣味：魔法書集めでかなりの数を持っている。

特徴：髪の色は薄い青色で後ろ髪は短めの少しラフな感じ、前髪は左分けて眼が少し隠れるくらい。

瞳の色は少し明るいレッド、肌は普通色で顔は整っている。
身体は細身だが筋肉質の体。

背景：両親は不明、生死も定かではない。

クレアスとは6年前ある森で拾われ3年間寝食を共にしてきた。
その3年間で主に魔法の修業と体力作りをこなした。本人曰く地
獄の方がまだマシだとか……

残りの3年間は「もうお前に教えることは無い、自分のやりたいよ
うにやれ」と言われレイズのもとを去つていったが、
不定期だったが手紙や電話をくれたりなどしていた。

その間、レイズはあらゆる武術や知識を学ぶため各地を転々としてきた。

学んだ武術を活かして独自の戦闘形態を作り上げている。
記憶力がとても良く大学卒業程度の知識は持っている。

得意魔法属性：火・氷・雷の3種。

尚、別の属性も使えるが威力が低くなるため基本的にはこの3種を使う。

戦闘スタイル：基本的には接近戦主体の魔法拳士だが後衛魔法も得意としているため

エヴァやフェイトと同じオールラウンドと記入しておいた。

魔力容量はネギやこのかに匹敵するほど。

魔力コントロールは完璧に出来ており、気も使えるが咸卦法かんかほうは自分には合わないらしく使用しない。

接近では「気」、後衛では「魔力」と分けて使っている。
瞬動術も使えるが、その際は気を使用していて完成形に達しているため縮地となる。

杖や籌を必要としない浮遊術も使える。

レイズに関してはこんな所ですかね.....

まだ設定としては考えている部分もありますが、それはまた追々本編で使用することにします。

え？ 年齢の割りに身長とか諸々が合つてないって？

では次行つてみましょー（オイ

名前：クレアス フレイアット • F • ブライアンク

性別：男

年齢：不明

身長：不明

性格：不明

趣味：不明

特徴：
……
不明

すいません。クレアスの方はまだ設定がまとまっていなくて……

多分、本編中での説明となると思います。
ん？ なら出すなって？

では次の連載でまた会いましょう ノシ

2時間目 サヨナラと初めまして

視点 レイズ メーメルディアナ魔法学校 校長室

そこには校長とレイズの二人だけがいた。

「それで、話つて何ですか？」

「まあ掛けたまえ、それと普段の言葉使いでかまわんよ」

「…………わかりました」

そう言われたので近くにあつた椅子に腰を掛ける。

「で、話つて何？」

「うむ、この手紙のことだな」

ローブから先程渡した手紙を取り出した。

「中身は読ませてもらつたのじゃが…………」

「…………？」

「何故でしよう…………」

物凄く嫌な予感がするのですが…………
頼むから氣のせいであつてくれ！」

「君にはワシの友人の学園の教師になつてもうつことになつた

「何の話か通じておしゃべりして「ちよつと待つた

あれ、今変な言葉が浮かんだよ!つな
ま、いいや。

何それ食べられるの?

教師?

今なんてつた?

え?

WHAT?

.....

ん？」

そつまつて校長の言葉を遮る。

「何で俺が教師なんかせにゃなんらかのだ

「…………君は聞いていいのかね？」

「何を」

「わうか…………」

校長は表情を変え何か思い出しげに口を開く。

「3年くらこ前に頼まれた事があつてのつ

「歸匠山へ」

「わむ」

「何て？」

「それはの…………」

「『近づかに私の弟子が手紙を持つてお前のところへ行くから、
その手紙に書いてある通りにしてくれ』と頼まれたのじや」

「それだけ？　いや、マテ

魔法学校の校長に“お前”ってあなたそんなに偉かつたの！？

「えと……………じゃあ手紙の内容って俺に教師になれって書いてあつたの？」

「**អេក្រង់បានឱ្យ**」

師匠おお！ あんた一体何考えてるんだああああ！？

いや待て！ まだ手はあるはずだ！ 考えろ！ 考えるんだ、俺！

「ちなみに『断つたり逃げたりしたりどうなるのかわかつて』いるだ
うつな』とも書いてあつたぞ」

終わつた

「わかりましたよコンチクショーリー！」

レイズの眼からは涙が溢れ出ていたとか

日本語の勉強やら荷物の整理、教員資格を取るため半年以上の月日が流れた。

ある駅のホーム

大きな荷物と杖を持った子供と一人の女性。

「もう行ってしまうのね……」

「お姉ちゃん……」

「……」

アーニャは黙つたままだった。

「僕、立派な魔法使いになつて戻つてくるからねー。」

ネギ

少し寂しさがあるが精一杯の笑みを見せ

「ええ、 もうね。 行ってらっしゃい、 ネギ」

「うと…… 行ってきます」

そしてアーニャの方へ顔を向け

「元氣でね、 アーニャ」

「う………… あんたもね」

ピコココココココココココ

列車の発車合図が鳴る。

「行つてきます」

そう言つて列車に乗り込んだ。

「体に氣をつけるのよー、 ご飯もけやんと食べてねー」

扉が閉まる

そして列車は瞬く間に走り去つていった……

行ってらっしゃい

一方レイズは」といふ

「えへと、鍵…………よし金も持つたチケットも持つたし、その他荷物もOK

家の玄関先で荷物の確認をしていた。

「ふう…………さてと、行きますか

その言葉と同時に扉を開ける

視点 ネギ □ 日本 駅前

「わ～、す～いや。 おつきな建物がいっぱいだなあ～」

でも麻帆良学園にはどう行つたらいいんだろ…………？

辺りをキョロキョロとうろついていると

「どうしたのボク？ ひょっとして迷子？」

「ん？ どうしたんだ？」

男女のカップルが近づいて話しかけてきた。

「あ、えっと………… 麻帆良学園にはどう行けばいいのでしょうか？」

「ああ、それならあつちの1・2番線のホームに入つて下り電車に乘ればいいよ」

男の方が1・2番線の入り口を指差して答えた。

「あつがどういります！」

頭を下げてお礼を言い急いでホームへと向かった

「気をつけてねえー！」

振り返ると一人とも手を振つてくれていた。

もう一度お辞儀をしてホームへと向かう

「おーい！ キップ、キップ！」

あ.....

「うわー、ニッポンは本当に人が多いなー」

電車の中で、周囲も込んできた。

「それに女人が一杯だ」

ネギの周りには制服を着た女生徒がたくさんいた。

『女の子にはやさしくなさいね』

金髪の女性の姉の言葉が浮かぶ。

「うん…………お姉ちゃん」

突然スピードが落ちたためか前と後ろの人に挟まれる。

「あうう～

「何？ あの子」

「外国人？ クスクス」

興味を持つたのか数名の女性がネギに笑みを見せる。

「僕どこ行くの？」

「！」からは先は中学、高校だよ

身長からして中学生以上には見えなかつたのだらう。

「いえ、その…………」

あれ…………鼻が…………

「ハ…………ハハ…………ハックション！――！」

「ふわあつ！」

瞬間的にネギの周りから強い突風が出来た。

きゃあ！

いやあつ

女生徒達のスカートがめぐり上がりそんな言葉が聞こえてくる。

「あ…………」

慌てて両手で口を塞ぐネギ。

「な、何なの今の？」

「つむじ風？」

『次は～、まくはり麻帆良学園中央駅～』

「あ、もう着ぐよ」

そしてプロシューと音とともに扉が開く。

「じゃあね坊や」

「気をつけてね」

「え……」

周りにいた人全員が外へ飛び出していく。

「時間やばっ！ 遅刻だー！」

「急げ！」

『学園生徒のみなさん、こちらは生活指導委員会です。今週は遅刻者ゼロ週間、始業ベルまで10分を切りました。 急ぎましょう』

「急げ急げーー！」

「ちこくだーー！」

目の前にはたくさんの生徒達が凄い勢いで駆け抜けしていく。路面電車に乗る者、スケボーやローラースケートで走る者、さらにはバイクに乗つて移動購買部と書かれた旗を付け飲食物を売る者、買う者までいる。

大半は自らの足で走っていた。

「わわわ、何コレー？ スゴイ人！」

「いそげー！」

「ちこくーー、ちこくやーー！」

「これが日本の学校か？」

ちーくー

『今週遅刻した人には当委員会よりイエローカードが進呈されます。くれぐれも余裕を持つた登校を.....』

驚きしかでないネギだつたが、時計を手に取り見ると.....

「わ、いけない！僕も遅刻する時間だ」

ヤバイー！

「初日から遅れたらまずいぞ」

そう思い足に入れ地面を蹴り、急いで走り出す。

視点　　？？？　in 麻帆良学園通学路

たくさんの人人が走っている後ろの方の列で人をどんどん追い抜かしていく二人組みがいた。

「やばいやばいーー、今日は早く出なきゃいけなかつたのにー。」

一人はオレンジ色の髪で鈴が2つ付いたリボンを2本使ってツインテールにした活発そうな女の子。

「でもさ学園長の孫娘のアンタが何で新任教師のお迎えまでやんなきやなんないの、しかも一人も」

「スマン、スマン」

もう一人は黒髪の長髪でローラースケートで登校する女の子。

「学園長の友人ならそいつもじじいに決まつてるじやん」

「やつけ？ 今日は運命の出会いにありつて書いてあるえ」

「え、マジー？」

「ほひーハハ」

そつと手帳を取り出して見せる。

「しかも好きな人の名前を10回書つて「ワン」と鳴くと効果ありやで」

「うそつー？」

「どうにも胡散臭い事を言つてゐるが

「高畠先生高畠先生高畠先生高畠先生…………」（以下略）

「ワンツー！」

実際に試す人もいる。

いきなり大声で犬の鳴き声を人間が発声させたためか彼女の周りを走っていた人達が一斉に驚く。

させた本人でさえも…………

「あははは、アスナ高畠先生のためなら何でもするな…………ホントにやるとわ…………」

最後の言葉は小さく呟く。

「殺すわよ」

彼女からは騙された自分を悔やむ気持ちと相手への憎悪で微妙な怒りが生まれた。

「えーと次は、逆立ちして開脚の上全力疾走50Mして「ニヤー」と鳴ぐ」

「やらねえーー！」

「にしてもアスナ足速いよねー、私コレやのに」

一瞬足元を見て呟く。

「悪かつたわね体力バカで」

その時彼女達の近くで風が走る。

「ん」

気づけばアスナと呼ばれた女の子の横を走る人影があった。

一緒に走るその人影の主は、表面は紅い髪だが下に黒毛があり、首の付け根くらいまであるであろう髪を黒毛の方だけ紐で後ろに束ねている。

小さな丸メガネを鼻に掛けていてたくさんの荷物を背負っている子供が一人いた。

そしてその子供が口を開く。

「あの……あなた失恋の相が出てますよ」

いきなりとんでもない事を言つ子供であつた。
し……しつれ……？

「え、……」

「な……し……しつ……つて」

アスナは少しよろめいて

「何だとこんがキヤー！」

「うああああーー？」

涙目なのに凄い形相で目の前に子供に迫る。

いえ何か古いの話が出てたようだつたので

とどどどどどどどど
元キト一語ハと承知しないれよ」

涙を流しながらなおも子供に迫るアヌガ

いえかなりトキッし失恋の相か.....」

一九四〇年九月

「なあなあ相手は子供やろー? 」この子初等部の子と違つん? 」

「あたしはねガキは大ツツキライなのよ！」

「せひや」

そういう放ち子供の頭を起用に捏んで片手で持ち上げる。

「取
・
り
・
消
・
しなさいよ～～～」

「イタイ、イヒヤイ」

「坊や、こんな所に何しに来たん?」

「——は麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子高エリア初等部は前の駅やよ」

「そう！ つまり子供は入ってきちゃ いけないのわかつた？」

顔を近づけ身体を震わせながらそう語る

は放してくだされい

あー……な、なんて舐暴力な人なんだ

「ほな、ウチら用事あるから一人で帰つてな」

「じゃあねボク！！！」

大声で怒鳴つて乱暴に子供を下ろす。

いや、あのボケは……」

「いやいいんだよアスナ君！」

その時、別の男の人の声が聞こえてきた。

「お久しぶりでーす！！ ネギ君ー。」

声に釣られて上を見上げると

「えーっ」

「あ」

そこには橋田形のメガネを掛けた渋めの男が窓から覗いていた。

「た、高畑先生！？」

「おはよー、」やれこれーす

「お、おはよー、」やれこま「久しぶりタカミチーーー。」

「ー？ 」

アスナが一瞬後退りする。

「し、知り合ー ー？」

「麻帆良学園くよつじやん、いい所でしょー？」

「ネギ先生」

- 10 -

「え……せ、先生？」

黒髪の女の子が聞いてみる。

—あ、ハイそうです

「ホント咳払いをし

「この度、この学園で英語の教師をやることになりました
ネギ・スプリングフィールドです。」

流石に驚いている一人。

「うわ、ちょっと待つてよ先生つてさーこいつはダメだ。」

アスナはネギに近づいて胸倉を掴む。

あんたみたいなガキンチーかー！」

「まーまーアスナ」

黒髪の女の子が抑えよつとある。

「いや彼は頭いいんだ、安心したまえ」

いつの間にかタカミチと呼ばれていた男が下りて来ていた。
そしてネギを放して下りてきた男に振り向く。

「先生…………そんな」と言われても…………

いくら頭ガキがいいからって…………
こんな子供が…………

「あと、今日から僕に代わって君達A組の担任になってくれるそう
だよ」

ガーン、という効果音とともに泣くアスナ。

「そ、そんなあ。 アタシ、こんな子イヤです。
さつきだつてイキナリ失恋…………いや、失礼な…………言葉を私に……」

…………

「いや、でも本当なんですよ」

「本当に……」

またまた胸倉を掴む。

「大体あたしはガキがキライなのよ!」

あんたみたいに無神経でチビでマメでミジンコで…………

などと暴言に近い言葉を吐きまくるアスナ。

「うう、ひどい言われ方だ。何だよ、この人ー。
占いだつて親切で教えたのにーー。」

「ん……」

あ、また……

「ハ……ハ……はぐれんつー！」

その瞬間、近くに居たアスナにだけ強く突風が当たったためか、制服の全てのボタンが弾き飛ばされ支えを失った制服は地面へと落ち、一瞬で下着だけの姿になる。
白いブラと可愛らしいうマの顔の刺繡入りのパンツが露になる。

「な……ー？」

「あ……」

状況が掴めないのか、驚いてなのかその場で立ち往生していた。

それを見ていたタカラミチは目を逸らす。

はう

そして、手で胸を隠しながらその場に座り込む。

くまパン……

毛糸のくまパンか

まつたぐー

そしてやつと口が開く。

「キヤ ッ 何よコレ ッ！」

体操用のジャージに着替えて学園長室へと向かう三人。

そしてやや乱暴に扉を開ける。

その部屋に居たのは奥でいつものように椅子に座っている学園長と、薄い青色の髪をし瞳は赤く顔は整つており、アスナと背は同じくらいで黒っぽい藍色のスーツを着た男がいた。

わー、かつこええなあー

誰？ この人、……

うわー、スーツ着てるしこの人も先生なのかな？

「あ、えつ……と、学園長先生。」ちららの人は……？

アスナが恐る恐る聞く。

あれっ？ ここの先生じゃないのかな？

「フォフォフォ、紹介しておこつかの」

「こちらは今日から2・A組の副担任をしてもらひことになった、レイズ・G・フライネス先生じゃ。ちなみに教科は数学じゃぞ」

そしてレイズはこちらに微笑んで

「よろしく」

2時間目 カミナリと始めたとして（後書き）

次回はレイズの麻帆良学園の経路にする予定です。

いやあー、二日で投稿する予定だったんだけど
流石にむずかしいですね、小説…………
まあ僕自身まだ学生ですので原作以外の所は言葉が見つからない一つ
ていうのか…………
更新は不定期ですがなるべく日にちを空けないよつにがんばります
！

3時間目 挿絵（複数枚）

14巻読んで気づいたんですけど番号とレイズって髪と眼の色が
いつもなんですね～（オイ

3時間目 挨拶

視点 レイズ いの日本 駅前

参った……校長に道聞いてけばよかつたな……
しうがない駅員に聞くか。

「すいません、まほじ帆良学園までの道のりを聞きたいのですが……」

改札の側で暇そうにしていた駅員に話しかける。

「それでしたら、1・2番線のホームに入つて下りに乗つてまほじ帆良学園都市中央駅で降りるとよろしいですよ」

「どうも」

キップを買いホームへと入つていく。

電車に乗り数分経つが制服姿の生徒は少ししか居なかつた。

数名の女生徒がレイズを見ながら何か話しているのが聞こえる。

「ねえ、あの人外国人？ ちょっとカッ」「よくない？」

「ええ～ そつかな？ 私はもう少し地味な方が好みかも」

「あんたつてそつぢ系？ 男は顔の方がいいじゃん」

などとレイズの耳に入つてくれる。

顔ねえ……俺まだ13なんですけどな。

『次は～、 麻帆良学園中央駅～』

ん、もう着いたのか。

やつぱりよつと早かつたなあ～…………

田の前を歩いている生徒は数えるくらいしか見当たらない。この学園の始業ベルが鳴るまではあと一時間近くある。

「とりあえず学園に向かつか」

そつぢくと前へと歩き始める。

「で、迷いましたと………… がむ」

すでに学園内には入つて学園長室に向かつていたレイズ。

あれだ……俺にはいつのまにか迷子の能力^{スキル}が付いたのかな。
イヤな能力^{スキル}だなあ

止むを得ず近くの女生徒に話しかける。

「聞きたいんだけど、学園長室つてどこにあるの？」

「すぐそこ」の角の突き当たりにありますよ」

何ですと……

「ありがと」

優しく笑みを見せ礼を言つレイズ。

女生徒の顔が見る見る紅くなつていぐ。

「ツ～…………い、いえどういたしまして！」

そう言つて小走りで廊下を駆けていく。

「？」

何だったんだ？ まいいいや、場所も聞けたし。

そして学園長室へと向かつ。

「失礼します」

扉を開け、田の前に見えたのはソファに座つて耳掃きを持った女性と、その女性の膝の上に頭を乗せて耳掃除をしてもうつてこるじじい。

「ああ…………アーリジヤ…………アーリ…………ん?」

レイズに返づいたじじい。

「「」」

満面な笑みを見せるレイズ。

カチャツ

帰るか…………

来た道を戻りつとある。

師匠には………… そうだな、つまへ歸つておけ。

また扉が開く。

「あなたレイズ先生…………よね？」

さつきの女性が呼び止める。

「いえ、多分人違いでしょ。俺はもう帰りますんで、それじゃ

「どうぞ中へ入ってください」

人の話聞いてますか？

まあいいか……

再び中へと入っていきレイズ。

さつきのじじい…………もとい学園長は奥の椅子に座っていた。

「フォフォフォ、さつきはすまなかつたのう」

「いえいえ、俺には関係の無い事ですか？」

「まあその話は描いといてじや、その格好は何とかならんかのう？」

現在のレイズの格好は黒のズボン、紅いVネックのTシャツに黒のコートを着ている。

「スーツは持つてきているので更衣室の場所でも教えてください」

「つむ、ではしづな君に案内してもらこなさい」

さつきの女性がレイズを見て微笑んでいる。

「よく似合つてるわよ、レイズ君」

着替えて更衣室から出てきたレイズ。

ネクタイは赤、白いYシャツの上に上下とも黒っぽい藍色スーツを着ている。

「わうなんですか？　JーーJのはあまり着たことなくて」

「Jで学園内、いや学園の内外で放送が鳴り響く。

内容はあと10分で始業ベルが鳴るといつものだった。

「戻りましょーね」

さつきが学園長室へと戻っていく一人。

「フォフォフォ、やつと先生らしくなったの？」

「そりゃどうも」

「早速じゃが、レイズ君の授業は明日からでのう今日は見学でもしてこなさい」

「わかりました」

「それともう住むといふは決まったのかな？　あいにく教職員用の宿舎は空きが無くてのう……」

「いえ、まだですが自分で探ししますので、心配なく」

バンッ！

扉が乱暴に開く。

入って来たのは三人。

背の低い子供とジャージ姿の女の子との学園の制服を着た女の子。少しの間があつて一人が口を開く。

「あ、えつ…………と、学園長先生。　うちの人は…………？」

レイズと学園長は特に驚いた様子も無く三人を見ている。

「フォフォフォ、紹介しておひつかの」

「あの子たしか向こうの学校で見た子供だよな?
てことは魔法関係か何かか?」

「うらは今日から2・A組の副担任をしてもらひとこなつた、
レイズ・G・フライネス先生じゃ。ちなみに教科は数学
じゃぞ」

レイズは三人に優しく笑みを見せる。

「よひしへ」

「なるほど、修業のために日本で学校の先生を

まさかこの子も教師になるとはな……

俺だけじゃなかつたのね。

てか何か作為を感じるんだけど?

「そりやまた大変な課題をもひつたの~」

「は、はい。よひしへお願いします」

小さくかしこまるネギ。

「レイズ君もそつなのかの？」

「いえ、多分違うと思こまへ」

「ふむ……しかし、まずは教育実習生となりになるかの？」

「はあ」

「今日から3円までじや」

ん？ なんだそんな短い期間でいいのか。

3円までか……頑張らなくちや。

「とにかく一人には彼女はあるのか？ ビージャな？ いわの孫娘いわのむすめがなぞ」

「ややわ、じこちゃん」

黒髪を入れずこのかと呼ばれた黒髪の女の子がどこから取り出したのか金槌を使つてシッ ハリを入れる。

「うよつと待つてくださいー！」

アスナの声が響く。

「だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！ しかもうちの担任だなんて……」

むへへへ

俺もその意見に大賛成。 てか学園長、 血出でますが平氣なので?

学園長は頭から血を出しながらフオフオフオと笑つて(?) いる。

「ネギ君、 ここの修業はおそらく大変じゃぞ」

学園長がアスナの無視して話し出す。

「ダメだつたら故郷に帰らねばならん。 一度とチャンスはないが
その覚悟はあるのじやな?」

「は、 はいっやります、 やりせんくださいー。」

あれ? 俺は含まれてないの?

このかはネギを見て微笑んで、 アスナは腕を組んで何か唸つてている。

かわえーな

さつきから修業つて何なのよーつ……

「つむ、 わかつた! では今日から早速やつてもうおつかの、 指導
教員のしづな先生を紹介しそつ

「しづな君」

「はい」

入り口とは別の扉が開き女性が入つてくる。

もうこればいいに思つたんだ?

「む、」

ネギの顔がしづな先生の大きな乳房の間にに入る。

「あら、『めんなさい』

「わ…………」

わざとなのか素でわからなかつたのだろうが、いや恐らく前者だろう。

「わからない」とがあつたら彼女に聞くといふ

「よろしくね」

しづな先生がネギにウイーンクする。

「あ、ハイ…………」

「もうもう、もう一つ」

「いのか、アスナちゃん しばらく一人をお前達の部屋に泊めても
らえんかの」

「げ」

「え…………」

「えええ」

何故そりつなる…………

「 もひつやんな、何から何まで学園長ーー。」

当の学園長はあいかわらずフォフォと笑つてこの

「 学園長、俺は別に大丈夫ですよ」

「 もひつはまつてものひ、相もまだ子供じやねひ」

「 「 「 「え?」」

ネギ、このか、アスナがそんな声を同時に発する。

「 どーいつ事ですか?」

「 レイズ君はまだーーなんじゅよ」

「 「 「 「ええええ」」

「 3つて…………年下!?…………見えない。

「 3かあー、見えへんなあー

あわわ、てつあつーー十歳くらーーだと悟つたのに。」

「ど、とにかくイヤですー！」

「ええやないの、アスナー」

「ガキはキライなんだってばー。」

「仲良くなれー」

「ハグフ.....」

園長の言葉で静まる。

ネギとアスナはそれぞれ着替えて机に向いて教室へと歩いていく。

なんかおかしいのよな、うーひー.....

「あの.....」

ネギが話しかけるとアスナは睨みつくる。

「あんたなんかと一緒に暮らすなんてお断りよー。寝袋でも暮らさばいいでしょ.....」

何かとんでもないことを言つてゐるアスナ。

「じゃあ私先行きますから、先生！！」

そう言つてアスナが教室へと入つていく、その後をこのかが着いていく。

「あ……」

残つたのはネギとレイズとしづな先生。

「何ですか、あの人は～～～？」

「ウフフ……あの子はいつも元気だからね、でもいい子よ」

「ハイ、コレ クラス名簿」

そう言つてネギとレイズに名簿を渡す。

「それより授業の方は大丈夫なの？ ネギ君」

「う……ちよ、ちよつとキンチョウワーしてきました」

「ほら、エリがあなた達のクラスよ」

廊下側の窓から覗く一人。

……！ うわー

中に見えるのはそれぞれ挨拶を交わし、肉まんを売つていたり、黒板付近で何か企む者、窓から外を眺めていたり、本を読んでいる者、何かを必死で描いている者、など賑やかな風景が目に映る。

これが…………僕がこれから教えることになる人達か…………

ふうん…………結構いるな。

「そうだ、クラス名簿!」

ネギが名簿を開く、続いてレイズも開く。

そこには1～31までの生徒の名前と出席番号、入ってる委員、部活やサークルなどが書かれていた。

それと手書きでタカミチからのメッセージなども書いてある。

「げ…………い、いっぱい…………タカミチからの書きじみがある

…………」

「早くみんなの顔と名前覚えられるといいわね」

「あうう」

「ううう…………こんなたくさん年の上の人達に教えるのか…………？」

「な、何だかドキドキしてきたぞ…………でも…………がんばらなくつけやー」

よし、覚えた。

てか1番目の生徒の服が違つたビックリだ?
まあ見ればわかるか。

「担任なんだしネギ君が先に入つたら?」

「え、あつう…………ハイ、そうですね。わかりました」

コンコン

教室の扉をノックするネギ。

「あ

教室内が静まりこのかが声を上げる。

来たな

くすくす

うしづつ

微かに笑い声も交じつて聞こえる。

ガラツ

横スライド式の扉が開く

「失礼しま.....」

と同時に上からチョークの粉たつふりの黒板消しが落下する。

ん?

ネギがそれに気づいたと同時に黒板消しがピタリと止まる。

!?

げつ.....

あ.....やば.....! これは有名な黒板消しトラップ! 日本にもある
んだ。

流石にやばいと思ったネギは黒板消しを動かす。

その間のやり取りは一瞬だった。

再び動き出した黒板消しはネギの頭に落とし粉が舞い散る。

「ゲホゲホ いやー、あはは。 なるほど ゲホ ひつかつかつちゃ
つたなあ ゴホ」

生徒達が見ている中、何ともわざとらしくハリネギ。
ネギが一步前へ進みロープに足が掛かる。

「へふつー?」

バランスを失い前へと倒れる。

「あぼ」

そこに水の入ったバケツが落^ハ下し頭から被る。

「あああああああ」

そのまま1回転し更に先が吸盤になつた矢が放たれる。

「さやふんつー！」

最後は木製の教卓に背中から入る。

「ありあり」

あははははは

教室内は笑いが飛び交う。

今の…………？

その中に一人疑問に思つた人が居た。

「な…………な…………」

「えつ…………」

「あ…………あれ…………？」

眼に掛かつたのが子供とわかつたのか数名の生徒が駆け寄る。

「えーっ、子供！？」

「君、大丈夫！？」

「てっきり新任の先生かと思って」

「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ」

しづな先生が手を叩き注目を惹いて叫び。

「あ、自己紹介してもらおうかしら、一人とも」

「は、はい」

「わかりました」

生徒は全員元の席に座り、教卓の前に立つネギとレイズ。

「ええと、あの……ボク……ボク……」

先に口を開いたのはネギ。

「今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました
ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけど
よろしくお願いします」

続いてレイズが話す。

「同じく、今日からこのクラスの副担任で数学を教えることになった
レイズ・G・フライネスです。これからよろしく」

.....

沈黙が少しの間続くが

『キャアアアアッ！ かわいいい／＼つ かつこいい／＼つ』

大勢で一人に駆け寄る。

「何歳なの〜！？」

「えうつ！？ 10歳で.....」

「13」

「え〜！？ 見えない！」

「どうから来たの！？」 「何人！？」

「ウェールズの山奥の「ウェールズってどこ？」 あつ／＼

「イギリスのバーミンガムから「バー……ガム？」」

「今どこに住んでるのー?」

「いや、まだどこにも…………」

「同じく

「血液型はー?」

「誕生日はー?」

「身長はー?」

「あーうーうー

「うょーとまー…………」

ワイワイ ガヤガヤ

教卓付近で盛り上がる生徒達。

「…………マジなんですか?」

一人の生徒がしづな先生に聞く。

「ええ、マジなんですよ」

「ホントにこの子達が教師なんですかー!?

「こんなカワイイ子やかつーいに子もいらっしゃっていいのーーー!?

「コラコラ、あげたんじゃないのよ。食べちゃダメ
ホントなんだー」

「ねえ、頭いいの！？」

「い……一応大学卒業程度の語学力は……」

「俺もその程度はある」

「スゴイ！…」

よ、よかつた。なんとか歓迎されてるみたいだ
ちょっと危なかつたけど……

う～む、師匠はこんなとこ送りつけて何をさせたいのだろ？
……

「一人はちゃんと教師の資格を持つてるけど、あなた達より年下よ。
お手柔らかにね」

『ハーヴ』

不意に一人の生徒がネギの胸倉を掴み教卓の上へと乗せる。

「ねえ、あんたさつき黒板消しに何かしなかった？」

その生徒とはアスナだった。

「何かおかしくない？ あんた」

「え……」

ネギの顔色が青くなる。

へえ～…………あれを見てた奴もいたのか。
一瞬だけだと思つたけど。

あわわわわ　　ツ
どうしよう！？

3時間目 挨拶（後書き）

たいして進んでませんね～…………スイマセン。
もう少し展開早めにした方がいいのかな？

最近寒くなつてきましたね～（俺の地域は
もう毎日耳とか顔がすごく痛いですＴＴ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4353d/>

魔法先生ネギま！～二人の子供は魔法先生～

2010年10月10日02時56分発行